

【余白上】30mm

宮古島市総合博物館紀要 第 25 号（2021）

【余白左】
21mm

来間島のスギヤとンドウイギーの復元模型製作の記録

【タイトル】M S 明朝・太字、13pt、2 行取り、中央揃え

【余白右】
21mm

與那覇 史香、砂川 奈美子

【氏名】M S 明朝、10.5pt、1 行取り、右揃え

はじめに 【本文タイトル】M S ゴシック、10.5pt

2021 年（令和 3）年 10 月、宮古島市において「国際サシバサミット 2021 宮古島^{*1}」が開催される。サシバとは、タカ科の鳥で、日本には春に青森県以南に渡来し、低山や丘陵地帯で繁殖する。秋になると越冬のため、繁殖地から南西諸島を経由して東南アジアやニューギニアに渡る。宮古諸島には、秋の渡りの時に大群で立ち寄るが、年々、その数が減少している。

同サミットでは、サシバの繁殖地、中継地、越冬地が集いサシバの未来について考える場として 2019 年より開催されており、宮古島での開催にあわせ、当館においてもサシバに関する企画展「サシバ展（仮称）」の開催を予定しており、現在、その調査研究

また、同サミットの事業として、今年度 2 種類作された。製作者は、来間島出身の国仲富美男氏らの復元模型の製作にあたった。来間島では、この捕獲用小屋の昼用をスギヤ（sīgja）、夜用をンドウイギー（nduigi）と呼んでいた。また、サシバのことを来間島の方言でタカ（taka）と呼ぶ。

当館では、スギヤおよびンドウイギーの製作工程の記録と、来間島におけるサシバとの関わりについて製作者の国仲氏に聞き取り調査（2020/8/27、10/2、10/8、10/9）を行った。本稿では、その製作工程の記録と聞き取り調査の報告をする。また、聞き取りの中で登場した植物や地名、サシバに関連する事項について来間島の方言で記録する。方言の表記は、カタカナと国際音声記号（簡略）を用いた。なお、カタカナで書き表せない音には、一応カタカナで表記した上、下線をつけて他の音と区別した。

【本文】

M S 明朝、10.5pt、1 段組、43 文字×37 行
（字送り：10.45pt、行送り：18.05pt）



写真 1 スギヤの設置場（○で囲った部分）
（空中写真：国土地理院提供）

参考・引用文献 【参考引用文献】M S 明朝、10pt

久貝勝盛 2018 「宮古のサシバ文化」『宮古島市総合博物館紀要 第 23 号』 宮古島市総合博物館

【図・表・写真等キャプション】
M S ゴシック、10pt

注釈 【注釈】M S 明朝、10pt

*1 国際サシバサミット

絶滅危惧種であるサシバの繁殖地、中継地、越冬地が集い、サシバの未来について考える場として 2019 年より開催されているサミット。2019 年に栃木県市貝町で開催され、2020 年に沖

【余白下】
31mm

【余白上】30mm

宮古島市総合博物館紀要 第 25 号（2021）

【余白左】
21mm

来間島のスギヤとンドウイギーの復元模型製作の記録

【タイトル】M S 明朝・太字、13pt、2 行取り、中央揃え

【余白右】
21mm

與那覇 史香、砂川 奈美子

【氏名】M S 明朝、10.5pt、1 行取り、右揃え

はじめに 【本文タイトル】M S ゴシック、10.5pt

2021 年（令和 3）年 10 月、宮古島市において「国際サシバサミット 2021 宮古島^{*1}」が開催される。サシバとは、タカ科の鳥で、日本には春に青森県以南に渡来し、低山や丘陵地帯で繁殖する。秋になると越冬のため、繁殖地から南

【本文】

M S 明朝、10.5pt、2 段組、21 文字×37 行
（字送り：10.45pt、行送り：18.05pt）
（段の幅：21.03 字、間隔：3.5 字）

越冬地が集いサシバの未来について考える場として 2019 年より開催されており、宮古島での開催にあわせ、当館においてもサシバに関する企画展「サシバ展（仮称）」の開催を予定しており、現在、その調査研究を進めている。

また、同サミットの事業として、今年度 2 種類（昼用、夜用）のサシバの捕獲用小屋の復元模型が製作された。製作者は、来間島出身の国仲富美男氏（1951 年生）で、自身の少年時代の記



写真 1 スギヤの設置場（○で囲った部分）
（空中写真：国土地理院提供）

【図・表・写真等キャプション】
M S ゴシック、10pt

憶をもとにこれらの復元模型の製作にあたった。来間島では、この捕獲用小屋の昼用をスギヤ（sigia）、夜用をンドウイギー（nduigi）と呼んでいた。また、サシバのことを来間島の方言でタカ（taka）と呼ぶ。

当館では、スギヤおよびンドウイギーの製作工程の記録と、来間島におけるサシバとの関わりについて製作者の国仲氏に聞き取り調査（2020/8/27、10/2、10/8、10/9）を行った。本稿では、その製作工程の記録と聞き取り調査の報告をする。また、聞き取りの中で登場した植物や地名、サシバに関連する事項について来間島の方言で記録する。方言の表記は、カタカナと国際音声記号（簡略）を用いた。なお、カタカナで書き表せない音には、一応カタカナで表記した上、下線をつけて他の音と区別した。

今回製作したスギヤおよびンドウイギーは、現在、当館に保管されており、同サミットやサシバ展にて展示されたのち、当館にて常設展示される予定となっている。

参考・引用文献

久貝勝盛 2018 「宮古のサシバ文化」『宮古島市総合博物館紀要 第 23 号』 宮古島市総合博物館 【参考引用文献】M S 明朝、10pt

注釈 【注釈】M S 明朝、10pt

*1 国際サシバサミット

絶滅危惧種であるサシバの繁殖地、中継地、越冬地が集い、サシバの未来について考える場として 2019 年より開催されているサミット。2019 年に栃木県市貝町で開催され、2020 年に沖

【余白下】
31mm

【余白上】30mm

【余白右】
21mm【余白左】
21mm【図・表・写真等キャプション】
MS「シック」、10 pt写真1 スギヤの設置場（〇で囲った部分）
（空中写真：国土地理院提供）

はじめに【本文タイトル】MS「シック」、10・5 pt

2021年（令和3）年10月、宮古島市において「国際サシバサミット2021宮古島*1」が開催される。サシバとは、タカ科の鳥で、日本には春に青森県以南に渡来し、低山や丘陵地帯で繁殖する。秋になると越冬のため、繁殖地から南西諸島を経由して東南アジアやニューギニアに渡る。宮古諸島には、秋の渡りの時に大群で立ち寄るが、年々、その数が減少している。

同サミットでは、サシバの繁殖地、中継地、越冬地が集いサシバの未来について考える場として2019年より開催されており、宮古島での開催にあわせ、当館においてもサシバに関する企画展「サシバ展（仮称）」の開催を予定しており、現在、その調査研究を進めている。

【間隔】

3.11字（12mm）※一太郎の場合：3字（11mm）

また、同サミットの事業として、今年度2種類（昼用、夜用）のサシバの捕獲用小屋の復元模型が製作された。製作者は、来間島出身の国仲富美男氏（1952年生）で、自身の少年時代の記憶をもとにこれらの復元模型の製作にあたった。来間島では、この捕獲用小屋の昼用をスギヤ（sugia）、夜用をインドウイギー（indugiri）と呼んでいた。また、サシバのことを来間島の方言でタカ（taka）と呼ぶ。

当館では、スギヤおよびインドウイギーの製作工程の記録と、来間島におけるサシバとの関わりについて製作者の国仲氏に聞き取り調査（2020/8/27、10/2、10/8、10/9）を行った。本稿では、その製作工程の記録と聞き取り調査の報告をする。また、聞き取りの中で登場した植物や地名、サシバに関連する事項について来間島の方言で記録する。

参考・引用文献

久貝勝盛 2018 「宮古のサシバ文化」『宮古島市総合博物館紀要 第23号』宮古島市総合博物館

注釈 【注釈】MS明朝、10 pt

*1 国際サシバサミット

絶滅危惧種であるサシバの繁殖地、中継地、越冬地が集い、サシバの未来について考える場として2019年より開催されているサミット。

来間島のスギヤとインドウイギーの復元模型製作の記録

【タイトル】MS明朝・太字、13 pt、2行取り、上揃え、3字下げ

【本文】MS明朝、10・5 pt、2段組、30文字×26行
（字送り：10・6 pt、行送り：18・3 pt）
（段の幅：30字、間隔：3・11字）

與那覇 史香、砂川 奈美子

【氏名】MS明朝、10・5 pt、1行取り、下揃え、1字上げ

【余白下】
31mm